

日本語自動詞における場所に関わる交替諸構文の特徴

杉浦 滋子

キーワード：日本語 場所 交替 デ格 ニ格

要旨

日本語自動詞における場所に関わる交替において存在構文、デ格構文のほかにニ格構文、無助詞名詞修飾があることを指摘し、『日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』を用いた調査に基づき、諸構文は「場所」が統語的に周辺的な位置あるいは主要な位置にあるか、そしてもうひとつの要素との結びつきがどの程度強いかに違いがあると主張した。

1.日本語の場所格交替

場所格交替とは場所が通常の場合として格表示される文と、主語あるいは目的語として格表示される文の両方が見られることを言い、英語を初めとして様々な言語で研究されている。(1)-(2)の(a)では場所がニ格表示、(b)では主格表示され、(3)-(4)の(a)では場所がニ格表示、(b)では目的格表示されている。

- (1)a. 駅に人があふれている。
 - b. 駅が人であふれている。
- (2)a. ノズルにほこりがつまっている。
 - b. ノズルがほこりでつまっている。
- (3)a. 壁にペンキを塗った。
 - b. 壁をペンキで塗った。
- (4)a. 部屋に花を飾った。
 - b. 部屋を花で飾った。

(1)-(2)は自動詞、(3)-(4)は他動詞の例だが、本稿では自動詞を対象とし、(1a)の「駅」を<場所>、「人」を<存在物>と呼ぶこととする。自動詞交替を扱った先行研究では(1)-(2)の二つのタイプが主に論じられてきた。<存在物>を主格表示する構文(1a)、(2a)を存在構文、デ格表示する構文(1b)(2b)をデ格構文と呼ぶことにするが、このほかに、(1a)と並行的な(5a)には(5b)のように「自信」がニ格表示される構文もある。これ

を二格構文と呼ぶこととする。

- (5)a. 彼らの表情に自信があふれていた。
b. 彼らの表情が自信にあふれていた。

さらに、(6)のように「自信」と「あふれる」が無助詞で「表情」を名詞修飾する形式もある。

- (6) 彼らは自信あふれる表情で試合に臨んだ。

(6)では「自信」も「あふれる」も独自の語アクセントをもっており、単に助詞が省略されているかのようにも見えるが、助詞を補うと不自然に聞こえる場合があり、通常の関係節が無助詞で現れたとは考えにくい。

- (7)a. ?彼らは自信があふれる態度で試合に臨んだ。
b. ?彼らは自信にあふれる態度で試合に臨んだ。
Cf. 彼らは自信にあふれた態度で試合に臨んだ。

本稿ではこれら四つのパターンを考察し、違いの記述を試みる。

2. 語彙項目の多義と交替

同じ自動詞でもすべての場合に場所格交替が起こるわけではない。場所格交替が起こるか否かで多義の様相を考察してみよう。「あふれる」について、『デジタル大辞泉』では次のような記述となっている。

- (8) 1 水などがいっぱいになって外にこぼれる。「コップに—・れるほど注ぐ」「川が—・れる」「涙が—・れる」
2 人や物が入りきらないではみだす。また、入りきらないほど多くある。「通路まで人が—・れる」「スタンドに—・れる観衆」
3 感情・気力・才気などがいっぱいに満ちている。「意欲—・れる作品」「夢と希望に—・れる青春」

この記述では「あふれる」の多義は「水など」「人や物」「感情・気力・才気など」というように、一部主語の指示物の性質によって分類されている。しかし、表す事態の性質からいうと1の「外にこぼれる」、2の前半「はみだす」はある範囲・容器から外部への移動を伴うのに対し、2の後半の「多くある」、3の「満ちている」ではそれが

ない。¹そこで、前者の意味を「あふれる（移動）」、後者の意味を「あふれる（存在）」と表記し分ける。

さらに、「あふれる（存在）」が「多くある」「満ちている」ことを表す場合名詞修飾でなければ「ている」を伴うが、(9)のように「ている」を伴わないで存在していなかったものが出現することを表すという意味をももつ。そこで、この意味を「あふれる（出現・存在）」と表記する。

(9) 体は感動に打ち震え、頬は紅潮し、目には涙があふれた。『消閑の挑戦者 パーフェクト・キング』岩井恭平 角川書店 2002²

「あふれる（移動）」の場合「こぼれる」「はみだす」のは範囲や容器からであり、必ず範囲や容器の内部とともに外部がある。しかし、「あふれる（出現・存在）」の表現では出現する場所、存在する場所以外の場所は表現される事態に含まれない。これらにおいてはある場所に物が出現することあるいは存在することの表現であり、その場所の外部は想定されていない。

「人や物」を主語とする2の前半は1のメタファー的拡張と見なすことができる。「外にこぼれる」という意味は、移動する<存在物>の最初の位置（「起点」）と共起し、移動する<存在物>の最後の位置（「着点」）と共起する。(10a)では起点がカラ格表示され、(10b)では着点がニ格表示されている。同じニ格表示であっても、「あふれる（移動）」では着点をあらわし、「あふれる（出現・存在）」では<場所>をあらわしている。

(10)a. あの人の目から涙がとめどもなく溢れた。『三角館の恐怖』江戸川乱歩 光文社 2004

b. 堰を切ったように涙がサクヤの頬に溢れた。『ラブ・ミー・テンダー 2』ひちわゆか ビブロス 2001

「あふれる（移動）」は2の前半で述べられているように、<存在物>が人や物でもあり得る。液体の比喩が人や物に及び、(10)と同じように起点がカラ格表示、着点がニ格表示される。

¹ Pinker (1989)では場所格交替において場所を container（容器）としているが、外部が想定されている「あふれる（移動）」と想定されない「あふれる（存在）」の場所を同じように容器と考えるべきではない。本稿の立場では存在を表す事態においては場所は容器ではない。

² 実例はすべて BCCWJ から採取した。

(11)a. 喫煙所から人があふれて、通行の妨げになった。

b. ホールに入れない人が廊下にあふれた。

そして、場所格交替が起こるのは「あふれる（出現・存在）」においてであって、「あふれる（移動）」では起こらない。(1a)と同じように場所がニ格表示されていても交替はしない。同じ語彙項目であっても意味によって交替の可否が異なるのである。

(12)a. ×サクヤの頬が涙であふれた。

b. ×ホールに入れない人が廊下であふれた。

「つまる」も多義であり、同じ辞書では次のものが第一、第二の語義として挙げられている。

(13) 1 すきまもなく入って、いっぱいになる。「立錐(りっすい)の余地もなく一・つた聴衆」「予定がびっしり一・っている」

2 途中がふさがって通路・管などが通じなくなる。「排水管が一・る」「鼻が一・る」

場所格交替が起こるのは場所が通路や管である2の意味のみであり、そうでない場所は(14b)のように交替しない。

(14)a. バッグに着替えがつまっている。

b. ×バッグが着替えでつまっている。

ただし、筆者の語感では、通路や管でなくとも(15)のように「着替えが入っているため他の荷物を入れることができず、バッグが容器として役に立たなくなった」という文脈でなら(14b)のような文も容認できる。

(15) バッグが着替えでパンパンにつまっている。これ以上何も入れられない。

このように、語義によって場所格交替が見られる場合と見られない場合があることに留意しながら分析を進めなければならない。

3. 各構文の違い

それでは「あふれる（出現・存在）」が「ている」を伴って存在を表現する次の三つの構文、存在構文、デ格構文、ニ格構文の違いは何だろうか。

- (16)a. 掲示板に祝福のメッセージがあふれている。
b. 掲示板が祝福のメッセージであふれている。
c. 掲示板が祝福のメッセージにあふれている。

(16a)では<存在物>が主語であり焦点がある。<存在物>に言及する副詞、<存在物>の存在の様態を表す副詞が共起するが、<場所>が主語のときにはそういった副詞は共起しない。

- (17)a. 掲示板に祝福のメッセージが数えきれないほどあふれている。
b. ×掲示板が祝福のメッセージ {で／に} 数えきれないほどあふれている。
(18)a. ノズルにほこりがびっしりつまっている。
b. ?ノズルがほこりでびっしりつまっている。

それではデ格構文(16b)とニ格構文(16c)の違いは何だろうか。(19)を見ると具体物は「ニ格」の構文に現れない、と一般化できそうに思われる。

- (19)a. ×駅が人にあふれている。
b. ×ベランダがいろいろなガラクタにあふれている。

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』で「あふれる」を語彙素読みで検索すると 3870 例が得られた。<存在物>が「ガ格」「ハ格」「モ格」表示されているものを存在構文として数えたところ 1197 例、「デ格」表示されているのが 171 例、「ニ格」表示されているのが 767 例、無助詞名詞修飾しているのが 942 例となった。(場所が主格で存在物への言及がないもの、「あふれさせる」「あふれるほどの」「あふれんばかりの」、名詞修飾ではなく無助詞のもの、誤分析の例を除いた。) <存在物>がデ格で現れる 171 例は、抽象物 27 例で具体物 144 例 (抽象物の割合 16%)、<存在物>がニ格表示される 767 例のうち具体物 23 例で抽象物 744 例 (抽象物の割合 97%) となり、確かに具体物ならデ格、抽象物ならニ格という傾向がある。しかし、これでは(16b, c)のようにニ格、デ格の両構文で現れうるものの説明とならない。

(20a)と(20b)を比べてみよう。「祝福の」という形容詞がない場合、デ格構文は容認性に差がないが、ニ格構文では容認されなくなる。つまりデ格構文では<存在物>が名詞修飾されてもされなくても影響はなく、ニ格構文では影響がある。また、(20c)で見ると、名詞修飾されていればニ格構文が容認されるわけではない。

- (20)a. 掲示板がメッセージであふれている。

- b. ? 掲示板がメッセージにあふれている。
- c. ? 掲示板が新規のメッセージにあふれている。

(16c)が容認されるのに(20c)がされないのは、祝福のメッセージが多数あることが「掲示板」の性質、それも感情に関わる性質を感じさせるのに対し、新規のメッセージが多数あることはそれが無いからと主張したい。さらに言うと存在構文、デ格構文は<場所><存在物>を表現するのに対し、ニ格構文においては前二構文の<場所>に対応するものが<物>、前二構文の<存在物>に対応するものが「それが多くあることが<物>の感覚・感情に関わる性質を表す」(ここでは<性質要素>と表記する)のである。

そして、抽象物でも(21)の「自信」のようにニ格のみが容認され、デ格が容認されないものもある。

- (21)a. ? みんなの表情が自信であふれている。
- b. みんなの表情が自信にあふれている。

存在構文とデ格構文では<場所>と<存在物>が表現され、ニ格構文では<物>と<性質要素>が表現されていると述べたが、「メッセージ」のように数えられ、比喩的に具体物と捉えることができるもの、「(インターネットの) 掲示板」のように比喩的に場所と捉えることができるものの場合、デ格構文は可能である。また、「掲示板に祝福のメッセージが多数ある」ことは「掲示板」の感情に関わる性質ともなりうる。そのため、デ格構文(16b)とニ格構文(16c)両方が可能となる。それに対し、「自信」のようなものは比喩的にであっても数えられる<存在物>とは解釈できないためデ格構文には現れない、また(20b)(20c)は「祝福の」のような感情に関わる修飾要素がないためニ格構文が容認されない、と説明できる。

存在構文、デ格構文の<存在物>、ニ格構文の<物>は意味役割という観点から見ればTheme(対象)となるだろうが、実際にどのような語彙項目が用いられているかをBCCWJにて調査したのが表1である。まず、「水」「涙」「湯」などの液体は存在構文には現れるが、デ格構文、ニ格構文にはほとんど現れない。「物」「人」など固体の具体物は存在構文とデ格構文では現れるがニ格構文には少ない。「光、音、匂い、空気」など抽象物ではないが数えられる具体物でないものは存在構文とニ格構文にある程度見られ、デ格構文には少ない。「喜び」「活気」などの抽象物は存在構文とニ格構文にはあらわれるが、デ格構文には現れない。液体が存在構文にのみ現れることから見ると、「あふれる(出現・存在)」の基本義は存在構文でのみ表現されると考えられる。

表1 「あふれる」

	液体	固体	光、音、匂い、空気 (不可算)	抽象物
存在構文 1197例	355例(涙217例、水60例、湯13例、血7例など)	351例(物58例、人23例、人たち6例、人々5例など)	66例(光25例など)	425例(思い15例、喜び14例、活気7例、言葉15例、気持ち12例、魅力10例など)
デ格構文 175例	5例(水2例など)	135例(人30例、人たち2例、人々5例、物6例など)	4例(声4例)	26例
ニ格構文 768例	0例	35例(緑7例など)	22例(光7例など)	744例(自信35例、魅力44例、活気40例、希望18例、愛15例、愛情14例、活力14例、才能12例、思いやり7例など)

ここから「あふれる」について次のようにまとめられる。

- (22)a. 基本義では<存在物>は「液体」で、存在構文のみ用いられる。この基本義から「固体」「光・音・匂い・空気」「抽象物」へのメタファー拡張が見られる。液体から固体へのメタファー拡張が可能なのは可算物が数多くある場合である。
- b. 存在構文で<存在物>=固体の場合、デ格構文との交替が可能である。ここでも可算物が数多くある場合に限られる。
- c. 存在構文で<存在物>=光・音・匂い・空気つまり不可算の場合、ニ格構文との交替が可能である。
- d. 存在構文で<存在物>=抽象物の場合、ニ格構文との交替が可能である。

「光・音・匂い・空気」そして「抽象物」において存在構文とニ格構文が可能なのは、これらがメタファー拡張により存在構文の<存在物>とも解釈でき、かつニ格構文の<性質要素>ともなりうるからである。

「みちる」でも(23)にみるように存在構文、デ格構文、ニ格構文が見られる。

- (23)a. 布団とシーツがベッドから落ちて、何とも言えない冷えた空気が部屋に満ちていたのだ。『Missing 10』甲田学人 メディアワークス;角川書店 2004
- b. 部屋は何とも言えない冷えた空気で満ちていたのだ。
- c. 部屋は何とも言えない冷えた空気に満ちていたのだ。

ただし「あふれる」とはいくつかの点で違いがある。まず、文章語的である。

BCCWJの文章のレジスターには「出版・新聞」「出版・雑誌」「出版・書籍」「図書館・書籍」「特定目的・白書」「特定目的・ベストセラー」「特定目的・知恵袋」「特定目的・ブログ」「特定目的・法律」「特定目的・国会会議録」「特定目的・広報紙」「特定目的・教科書」「特定目的・韻文」があるが、この中で「特定目的・ブログ」がもっとも話し言葉的であると思われる。「特定目的・ブログ」で使用されていたのは「あふれる」3870例のうち392例(0.1%)、「みちる」2461例のうち107例(0.04%)であるので、「あふれる」の方が話し言葉的であると考えられる。

BCCWJで語彙素読み=ミチル、品詞=動詞で検索したところ、得られたのは2461例で、そのうち存在構文が239例、デ格構文が32例、ニ格構文が1957例であった。(「潮」「時」「月」を主語とするものなどを除いた。)つまりデ格構文は非常に少なく、存在構文も多くなく、ニ格構文が大部分となっている。構文ごとの存在物の性質は表2のようになった。

表2 みちる

	液体	固体	光、匂い、音、 空気	抽象物
存在構文	13例	15例	82例(光11例、 匂い・匂い10例など)	127例(エネルギー6例、 気配6例、力6例など)
デ格構文	0例	8例	10例	14例
ニ格構文	1例	13例	58例(光12例、 笑い・笑い声6例など)	1885例(自信102例、 希望70例、活気56例、 活力42例、悪意42例、 威厳40例、苦渋36例など)

「みちる」の原義が<存在物>=液体だったとしても、現在では液体に使われることは少なく、ニ格構文で<物>の感覚・感情に関わる性質を表すことが主になっている。そのほかに「あふれる」との違いは「あふれる」が<物>のプラスの価値に関わる性質に

限定されているのに対し、「みちる」は「悪意」「苦渋」などのマイナスの感情的価値に関わる性質をも表す。また、後述するが、「あふれる」とは違い、無助詞名詞修飾をしない。

固体に用いられる例も見られる。これももちろんメタファー拡張によるが、Lakoff and Johnson(1980)によって古くからの研究の対象である文学的なメタファーだけでなく、日常的に用いられるメタファーが多くあることが指摘された。つまりメタファーには文学的なメタファーと日常的なメタファーがあるのである。筆者の語感では(22b)で述べたように「あふれる」の<存在物>が多数の固体でありデ格表示される(24a)、「あふれる」「みちる」の<性質要素>がニ格表示される(25a-b)は日常的なメタファーである。それに対し、「みちる」の<存在物>が多数の固体でデ格表示されている(24b)は文学的なメタファーである。用例数の多寡もこの見方を支持する。

(24)a. かれらが互いに仲間を誘いながらやってくるため、たちまち店は客であふれた。

b. かれらが互いに仲間を誘いながらやってくるため、たちまち店は客で満ちた。
『司馬遼太郎の贈りもの 5』谷沢永一 PHP 研究所 2001

(25)a. そんな彼の作品は優しさと愛情にあふれている。『ミセス 2003 年 10 月号 (通巻第 584 号)』文化出版局 2003

b. 大虎の手を借りながら立ち上がる老虎の目は、愛情に満ちていた。『チャイナタウン・ブルース』立原とうや 集英社 1995

4. 無助詞名詞修飾

「自信あふれる態度」のような表現が通常統語的な節による名詞修飾(関係節)ではないことを述べた。BCCWJ で実際に「～あふれる」という形式が名詞修飾している例 945 例を調査すると次のようであった。

表 3 「あふれる」無助詞名詞修飾

液体	固体	音、匂い、空気	抽象物
2 例	46 例 (緑 30 例、笑顔 8 例など)	19 例	875 例 (～感 199 例、魅力 38 例、オリジナリティ 25 例、活気 28 例など)

無助詞名詞修飾に現れる抽象物はニ格構文と共通する部分が多く、意味の上でも「あふれる」に前接する名詞が<性質要素>、修飾される名詞が<物>でその物の感情に関わる性質を表していると分析できる。また、分類の上で「緑」を「固体」に含めたが、これも不可算物として「音、匂い、匂い、空気」のグループに入れるべきかもしれない

い。ただし二格構文と異なる点は、「～感あふれる」「～感覚あふれる」「～テイストあふれる」という形式が多い点である。用いられていた例を挙げる。

- (26)a. 199 例：既視感 グルーヴ感 スイング感 ビンテージ感 リッチ感 リゾート感 スピード感 モード感 クラフト感 ワイルド感 ボリューム感 リズム感 手作り感 スケール感 ローカル感 ナチュラル感 爽快感 生活感 ハッピー感 正義感 高級感 清潔感 重厚感 色彩感 存在感 上質感 木質感 実感 果実感 現実感 充実感 臨場感 情感 旅情感 抒情感 剛性感 季節感 自然観 疾走感 立体感 緊張感 動感 躍動感 肉感 緊迫感 素肌感 幸福感 開放感 親密感 生命感 透明感 清涼感 重量感 力量感 力感 迫力感 寂寥感 悲愴感
- b. 8 例：ラウンジ感覚 スポーツ感覚 アート感覚 リゾート感覚 手作り感覚 人権感覚 現実感覚 現代感覚
- c. 13 例：α テイスト エスニックテイスト ドラッグテイスト ヴィンテージテイスト スポーツテイスト スクールテイスト トラッドテイスト ハワイアンテイスト ヨーロピアンテイスト アメリカンテイスト 南国テイスト

ここには「正義感」「清潔感」「季節感」など、語彙項目として成立しているものもあるが、そうではないものも見られる。「果実感」「自然感」は耳慣れないが、(27)のように「あふれる」と共に用いられ、それぞれ「果物の実を思わせる」「自然を思わせる」と容易に解釈される。

- (27)a. 果汁たっぷりのオレンジピールを加えて焼き上げました。オレンジの果実感あふれる味わいです。 Yahoo!ブログ 2008
- b. 実もの、あるいは野菜、彩りをそえる花やアイビーを使って自然感あふれるリースを作ってみましょう。『ジェーン・パッカー四季のアレンジメント』ジェーン・パッカー 誠文堂新光社 1998

とすると、「～感あふれる」、そして類似の「～感覚／テイストあふれる」という形式は語彙登録されているわけではなく生産的に生成されていることになる。「～感／感覚／テイスト」に共通の意味的な性質とは人間が物を知覚した際に物から受ける印象を表していることであり、これはまさに<性質要素>の特徴である。

5. 考察

日本語で場所格交替と言われる現象を扱う際に、まず指摘しておきたいのは、英語のような言語と同じように日本語で「場所格」という用語を使うべきではないという

ことである。英語のような言語では言語外世界での位置関係を表す前置詞を用いる。「『彼』の位置が部屋の中」であれば英語では(28a,b)のように同じ前置詞を用いるが、日本語では、言語外世界での位置関係が同じであっても場所が必須要素である場合には(29a)のように二格、そうでない場合には(29b)のようにデ格を用いる。

(28)a. He is in his room.

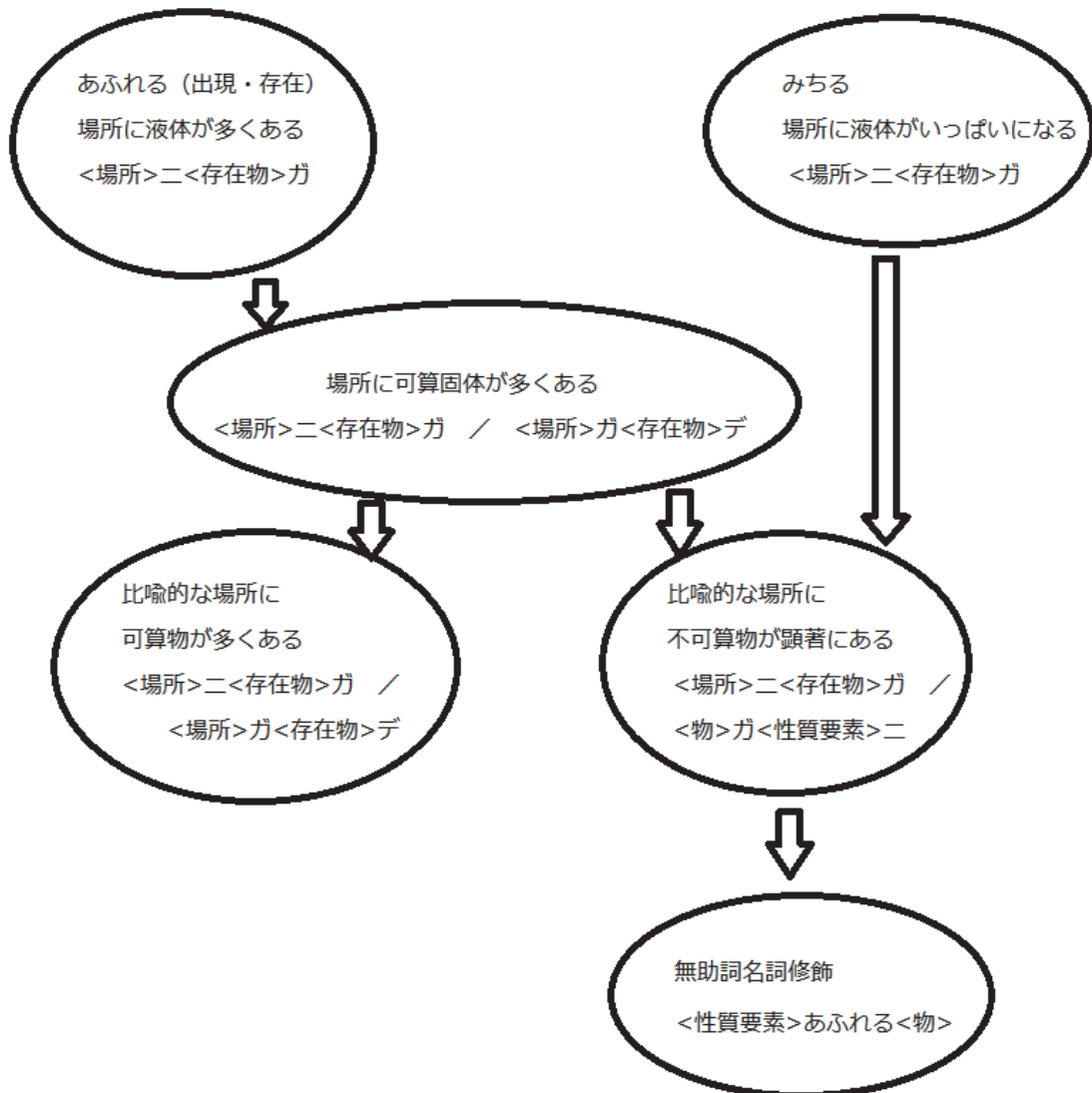
b. He is studying in his room.

(29)a. 彼は部屋にいる。

b. 彼は部屋で勉強している。

つまり日本語で場所格交替という用語を使う場合には、英語のように言語の格あるいは接置詞が現実世界での場所や位置関係を表す言語との違いを認識した上で使うべきである。実際に日本語のデ格は場所のほか原因、手段、様態などに、二格は場所のほか着点、動作が向かう対象、受動文や使役文の動作主、原因などに用いられ、デ格、二格を場所格と考える根拠は強くない。

存在構文、デ格構文、二格構文、無助詞名詞修飾において「あふれる」「みちる」のメタファー拡張、意味の変化、交替がどのように起こるかを次の図に示す。表の「光・音・匂い・空気」と「抽象物」を図では「不可算物」としてまとめた。上述のように「みちる」は原義では現在あまり用いられず、「比喩的な場所に不可算物が顕著にあ」り、かつその不可算物が感覚・感情に関わる性質を表す二構文で多く用いられる。この図は(24b)のような文学的なメタファー拡張を含まない。



また、「あふれる」「みちる」どちらも「比喩的な場所に不可算物が顕著にある」ことを二格構文で表すが、それと共通の性質をもつ無助詞名詞修飾をするのは「あふれる」のみである。「～あふれる」と類似の形式としては「～ただよう」がある。

(30) カルフォルニアに住むようになってから北欧出身者独特の哀愁漂うギターソロがさびれてしまったのかもしれない。Yahoo!ブログ 2008

BCCWJで名詞に直接語彙素読み「タダヨウ」が続く例を検索したところ、名詞を修飾する「～ただよう」が110例あった。「哀愁ただよう」(15例)のように定着したコロケーションと考えられるものもあるが、(31)のような例もあり、「～あふれる」と同じように生産的に生成されることがわかる。

- (31)a. 基本のボーダーTと言えはやっぱり、クラシックなマリンの香り漂う、このタイプ。『MORE (モア) 2003年9月号』集英社
b. 新ブランドで注目は、南米のエスニックテイスト漂う“エリサ アテニエンス”。『Domani 2005年8月号』小学館

まとめると、存在構文では<場所>は主格ではない統語的に周辺的な地位にあり、<存在物>が主格という主要な地位にある。デ格構文、ニ格構文では存在構文で<場所>であるものが主格となり、統語的に主要な位置に付く。それに伴い、存在構文で主格の要素がデ格構文でデ格、ニ格構文でニ格となる。不可算物がニ格、可算物がデ格で現れる、つまり不可算物が<性質要素>となりうるのに対し可算物がならないのは、可算物は物としての独立性が強いためと考えられる。不可算物は比喩的に<存在物>として存在文で表現することも可能だが、物としての独立性が弱くもうひとつの要素の<性質要素>ともなり得る。ニ格はより統語的に中心的な位置にあることを示しているのである。名詞修飾で無助詞ということは<性質要素>と動詞がさらに強い結びつきで<物>の性質を表現していると考えられる。存在構文—デ格構文—ニ格構文—無助詞名詞修飾は連続として考えることができ、場所が統語的に主要な位置を占めるようになり、もうひとつの要素との結びつきが強くなっていく様相を見せる。

6. 結び

本稿では存在構文、デ格構文、ニ格構文、無助詞名詞修飾の特徴づけをBCCWJのデータを用いて行い、場所が統語的にどのような位置を占めるか、もうひとつの要素との結びつきがどの程度強いかについて違いがあることを示した。

今後の課題として、日本語においては無助詞修飾がどのように生成されるか明らかにしていきたい。他言語をも視野に入れた観点からは、英語のように接置詞が物と場所の関係をダイレクトに表す言語における場所格交替との違いを明らかにする必要がある。

参考文献

- 石川慎一郎(2017)「現代日本語における『デ』格の意味役割の再考—コーパス頻度調査に基づく用法記述の精緻化と認知的意味拡張モデルの検証—」『計量国語学 31-2』 p.99-115.
伊東朱美(2015)「日本語の移動変化動詞と場所格交替」『東京外語大学留学生日本語教育センター論集 41』 p.95-105.
奥津敬一郎(1981)「移動変化動詞文 —いわゆる spray paint hypallage について—」『国語学 第127集』 p.60-48.

- 川野靖子(2006)「現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象：格成分の対応の仕方」『日本語の研究 2(1)』 p.32-47.
- (2009)「壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞：交替の可否を決定する意味階層の存在」『日本語の研究 5(4)』 p.47-61.
- 杉浦滋子(2020)「日本語の場所格交替における全体効果と動詞の語彙的意味」『言語と文明 第18巻』 p.3-17
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago University Press.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and cognition – The acquisition of argument structure*. MIT Press.
- 国立国語研究所『日本語書き言葉均衡コーパス』 https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/
- デジタル大辞泉 <https://daijisen.jp>